

独立無線ヤ一三一小隊部隊略歴（遊一ニ九八二）

年月日

概

要

昭一九、九、三〇	軍令陸甲ヲ百三十一号により独立無線ヤ一三一小隊編成を命ぜられ滿洲回東安 電信ヲ七連隊に於て編成に着手
九、三〇	編成完結
一〇、一四	ヤ三十七軍令下に入る
一〇、二六	釜山港出帆
一〇、二九	門司港出帆 輸送船「有馬山丸」
一一、一九	昭南港上陸
一一、三五	昭南港出帆 輸送船「扶余丸」
一一、三六	昭南港より北「ボルネオ」レ「クタン」レ港に向け前進中、北緯の度一分、東經一 〇八度二八分附近海面に於て連合軍潜水艦の襲撃を受け之と交戦せるが、魚雷 命中し沈没、此の際兵三名戦死す
一一、三六	北「ボルネオ」レ「クタン」レ港上陸
一二、二七	同日より同地附近の防衛並防衛通信に從事す
一二、二七	北「ボルネオ」レ「クタン」レ市南郊外に於て演習訓練中、兵一名断崖より墜落し 公傷死
一三、二六	北「ボルネオ」レ「アピ」レ方面に於て激戦展開せられありし所本日（二六）の戦いに際し

年月日

自昭一九三三
至昭三〇八二六

八一六

二一、三、三〇

三、二八

三、三〇

概

要

人事掛下士官一名生死不明となる

右下士官は「アピレ」に在りし第四通信隊に業務連絡のため全通信隊本部勤務を命ぜられ、本部に於て勤務中各方面に於ける戦斗に参加、「ボーポート」北方ニ埋の地点に於て生死不明となりたる模様なり。

右は独立無線カーニ九小隊長富田中尉よりの求電に依るも、其の後情況最悪、通信杜絶等のため遂に判然するに至らず。

間、北「ボルネオ」に在りて主として独立混成オセチ一旅団の旅団遠隔通信に任じ、「アピレ」、「シブレ」、「ポンチマナツケ」、「シンカロン」に在りて通信網を形成す。

此の間、屢々連合軍機米襲のため通信実施困難を極めしが、

空襲に際し電報配達中の兵一名戦死

復員のため「クタン」に港出帆

大竹港上陸

復員完結

歴代部隊長名

陸軍中尉 榎尾 秀治

部隊事情指通者

北海道夕張市末広三丁目四ノ三

陸軍中尉

篠尾 秀治

岐阜県稲葉郡神原郡

人事掛

陸軍軍曹

水野 和夫

(303)

1944

独立機関銃ヲ二十大隊部隊略歴 (継三三三四)

年月日

概

要

昭五、八、三〇	独立機関銃ヲ二十大隊編成要員として、大隊長菅野大尉以下三三四名 仙台茨 矢ヲ四冊隊補充隊に配布
八、三〇	同日独立機関銃ヲ二十大隊に編入
九、六	独立機関銃ヲ二十大隊の編成を完結す 南方派遣のため二梯団となり、カ一梯団大隊長之を指揮し、カ二梯団カ二機関 銃中隊長指揮し、仙台駅を出発す
九、七	十四時品川駅に於て輸送指揮官、独立機関銃ヲ二十二大隊長今関中佐の指揮下 に入り門司に向い出発
九、九	六時門司港駅に到着
九、一〇	門司市清見国民学校に宿営す
九、一一	十三時 大修丸に乗船 門司港を出帆す
九、一七	台湾高雄港に入港碇泊
九、二三	高雄上陸 船内に於ける休養の給与不足並健康回復を図リ 再大修理丸に上船、全港を出帆せり
九、二五	高雄港出帆以来、北ノボルネオレミリ港に上陸する迄、数次に亘る敵潜水

ノボルネオレ

五、一七	艦の攻撃を受け、船団の約半数は大破沈没せしめ、大船丸は異常なく 「ミリ」港に入港す 上陸せる大隊は灘作命に基き、直ちに東海州「タワオレ」に転進を命ぜられ、数 隻の発動船に分乘
五、二一	「ミリ」港を出帆せしが、当時海空共敵の跳梁下におり、已むなく
五、三一	東海州「サンダマン」に上陸せり。 大隊は大塚部隊長の指揮下に入りしめられ「サンダカン」地区の対空戦斗並海 岸地区に於ける陣地構築作業に従事す。
五、三六	灘作命に基き大隊は東海州「サンダカン」より西海州「アピレ」へ転進を命ぜら れ、大隊を二梯団に分ち、
五、一六	カ一梯団カ一梯中隊長阿部中尉之を指揮し山本大隊長の指揮下に入り「サンダ カン」を出発
五、三三	カ二梯団菅野大隊長指揮の下に出発 一ヶ月に亘る長期間休養、給与の不足に堪え
五、一六	カ二梯団 西海州「アピレ」に到着す 「アピレ」に到着せる大隊は、直ちに家村部隊長の指揮下に入りしめられ、

年月日	概
昭二、五一四	<p>カ一附中隊は「アピ」九六一二〇高地の陣地掘築に、カ三、カ三附中隊をして飛行場西側高地一帯の陣地掘築に従事するの外、「アル」岬対空射撃部隊を配置し、海上監視を兼ねたり。</p> <p>情況の急変に伴い、部隊は西海冊「ホーホート」に転進を命ぜられ大隊はカ三附中隊を家村部隊長の指揮下に入らしめたるまま、本部カ一附中隊は三梯団となり行軍にて「アピ」を出発</p> <p>「バパール」より汽車輸送に依り</p> <p>「ホーホート」に到着せり。</p> <p>「ホーホート」に到着するや、直ちにカ四矢站地区隊長西依中佐の指揮下に入らしめられたるも木村部隊長到着と同時に同部隊長の下に指揮を移せられたり。</p> <p>今地に於て全力を以て陣地掘築中、敵は「ラブアン」方面より逐次バタス河を遡行すると共に「ウエストン」 「ボーホート」鉄路上に進攻し来り、彼我主力交戦するに至れり。</p> <p>同日木村部隊長負傷後退し、大河内部隊長全般の指揮に当たれり。</p> <p>砲臺及機上より銃臺を以てする絶対優勢なる敵に対し、我は僅かに重機銃を唯一の重火器として對抗せり。</p>
六二四	
五、一九	

六二九	戦斗激烈の度を加うるに伴い、全地の確保困難となり、命に依り「シンバンカンレ」の線に、更に
六三〇	六二哩の地点に陣地を後退したり。
八一九	未求約一ヶ半、全地点を死守し奮斗を続ける中、停戦の本命を蒙り。
九二六	停戦協定に基き「ポーホート」收容所に入所。
三二、四一〇	「パパール」收容所を経て
四三四	「パパール」收容所に後動、全收容所に於て作業隊として「ラブアン」市に於ける作業に競争せり。
三五	復員船、元航空母艦葛城に便乗
三二八	大竹に入港
三二八	復員せり。
三二八	アピに残置せる一部ヲ三附中隊は停戦後アピ收容所に入所、全地に於いて復員船に便乗、内地に帰還せり 歴代部隊長名
陸軍大尉 菅野本枝	陸軍大尉 菅野本枝
陸軍大尉 菅野本枝	陸軍大尉 菅野本枝

独立機関銃ヲ二十二大隊部隊略歴 (進一四三〇〇)

年月日	概要
昭一九、八、三〇	編成完結
九、一〇	カ三十七軍編入のため門司出發
一三、一二	昭南上陸
二〇、二、四	同地警備
八、一五	北「ボルネオ」クナニ上陸
二、三、一一	クナニ地区警備
三、九	クナニ警備隊を解く
三、一〇	内地帰還のため「クナニ」出發
三、一〇	大竹上陸
三、一〇	復員完了
	内地出發時編成人員
	本部料校以下 一〇名
	カ一中隊料校以下 一〇八名
	カ二中隊 一〇八名
	カ三中隊 一〇八名
計	三三四名

要

1949

				復員完結迄の欠員
		内地入院	四名	
		昭南入院	三名	
		死亡	三名	
		計	一名	
内地帰還時転入せる者				
将校以下				
六九名				

(309)

1950

独立野戦高射砲第六十四中隊部隊略歴（雑二〇一六）

年月日	概要
昭一九、一、二〇 至 二〇、一、二五	北「ホルネオ」に於ける復讐成 独立野戦高射砲第六十四中隊編成下令（オ三十七軍下） 編成完結
昭一九、一、二五 至 二〇、一、三〇	北「ホルネオ」に於ける遠裏作戦に参加 復員完結（於大竹） 編成整備並指揮隷属関係 矢員 中隊長以下一三六名
昭二〇、五、三	高射砲四門 機関砲一門（臨時） 高射機関銃二門（臨時）一米測遠機一 オ三十七軍下 北「ホルネオ」ミリ地区警備隊 備考 高射砲四門は英回製混成砲にして照準具皆無の爲、 戦斗は全て信管、砲身射裏によつて低空飛来機のみ射撃す。 参加せる主要なる作戦 「ミリ」地区対空戦斗に於て戦斗機十三機喪墜、十六機裏破 吾方、戦死三、戦傷五、火砲軽微損傷

自
二〇、六一五

対敵艦船攻撃戦

砲弾を約一万米沖にある敵船団に対し待命により実施相当の損害を与え噴詞を受く。吾方船砲射裏により砲火校材一相当の害あり。

以右弾薬なき迄砲は破壊す。

以右命により後退、後方任務につく、地上戦斗 戦死一四

終戦より帰還迄の行動

主力は「ミリー」州「テマム」に於て終戦へ一部「クチン」分遣隊は「クチン」に於て

二〇、九三二

「ミリー」進出

一〇、二二

収容せる「ミリー」船にて「クチン」着

一〇、二八

「スリオ」収容所入

一三、二六

「リントン」収容所後転、「クチン」分遣隊と合隊

二一、三、一〇

「クチン」港にて輝山丸に乘船

三、一三

出港

三、九

大竹入港上陸

三、一〇

復員完結

部隊の経歴中特異と認めらるる事項

本誌第一二内

年月日	要
	<p>概</p> <p>裝備に於て「ピツカース」式三七吋砲にして照準具皆式視測なきは特異なるに之を以て対艦砲群船団に対し射撃を敢行し、血度に対し裏北没（警備隊確認）し得たるは特に異とする所である。</p> <p>歴代部隊長名</p> <p>ノ 陸軍中尉 鈴木健次（戦死）</p> <p>ス 代理 陸軍少尉 藤原 喬</p>

独立自動車方三〇七中隊部隊略歴（一七四一〜一七四五）

年月日	概	要
昭天、九、二七	台湾方七十二部隊に於て臨時編成	
五、一	高雄港出帆 山に於て作戦待機	
二七、二、六	秀英出港 高雄に於て作戦待機	
三、一〇	高雄出港	
四、五	コバタビヤレ入港	
三七	<p>方十六軍直として、北コボルネオに派遣以来、南方燃料廠に配属、主力をココーラブライトし、一部をミミレに配置せしめ、全隊の行う採油作業に協力</p> <p>コブライトより一部をコブルネイレ市に移駐せしめコブルネイレ・精油所建設部の作業に協力せしむ。</p>	
自、六、二七 至、八、二四	<p>敵未攻に際してコフルネイレに在りし城中尉以下一部は独混五六旅司令部と行動、北コボルネオに西海州コラダに転進、待戦となる。</p> <p>コスライドレに在りし中隊長上村中尉以下主力及コフルネイレの一部を含むはコセリヤレに在りし南燃コセリヤレ磁業所と行動し、蘭領コバーレに於て</p>	
一〇、二七	停戦を知る。	

ボルネオ一ニ外

年月日	概要
昭三、四、二六	<p>此の間土民軍と交戦すること数を知らず、死傷者繰出す。 7ミリレに在リし一部飯田中尉以下は7ミリレ山中にて南燃7ボルネオレ工廠 と戦斗参加、終戦となる。 大竹港に上陸 後員完了 歴代部隊長名 1、陸軍中尉 大塚 恭 順 2、陸軍中尉 上 村 栄 吉 3、中隊長代理 陸軍中尉 坂 正</p>

建築勤務ヲ七十五中隊部隊略歴（遊一〇一一）

年月日	概要
昭一六、七、三一	臨時召集により歩兵百五十三聯隊に應召
八一	建築勤務ヲ四十八中隊に編入
八四	編成完結
八一五	屯營出發
八一八	六二野戦建築隊編成に入る
八一三	大連港上陸
八一四	関東州双通過
八一七	滿洲回三江省佳木斯到着
九一三	三江省佳木斯出發
九一四	東南省東安到着
一〇、四	大連到着
一〇、五	大連港出發
一〇、一三	从印西貢港上陸
一七、三三〇	西貢港出發
四、八	昭南港出發

年月日	概要
昭七、五、一	コスマトラレ、コメダンレ到着
八、三〇	コメダンレ出発
九、一	昭南港上陸
八、五、三〇	転進の爲、昭南港出発
五、三二	コジヤワレ、コジヤカルタレ港上陸
六、一	コスラバヤレ港出発
六、四	コセレブスレ島、コマカツサルレ港上陸
九、三、五	本隊復帰の爲、コマカツサルレ港出発
一〇、三、五	昭南港上陸 本隊復帰
一、六、三三	転進の爲、昭南港出発
七、六	北コボルネオレ、コアピレ港上陸
二〇、三、一〇	昭和十九年軍令甲ヲ一五五号ク依り建築勤務ヲ七十五中隊に転属 結成完結
九、二、四	北コボルネオレ、コゼツセルトンレに集結
三、四、一五	復員のため、コゼツセルトンレ出発
四、二、五	復員完結 大井港
	部隊事情精通者

ボルネオ一三内

本籍地 奈良県生駒郡沓掛村大字西田中三九三
現住所 京都府下京区入船小坂町二 警察住宅内

陸軍軍曹 寺島与太郎

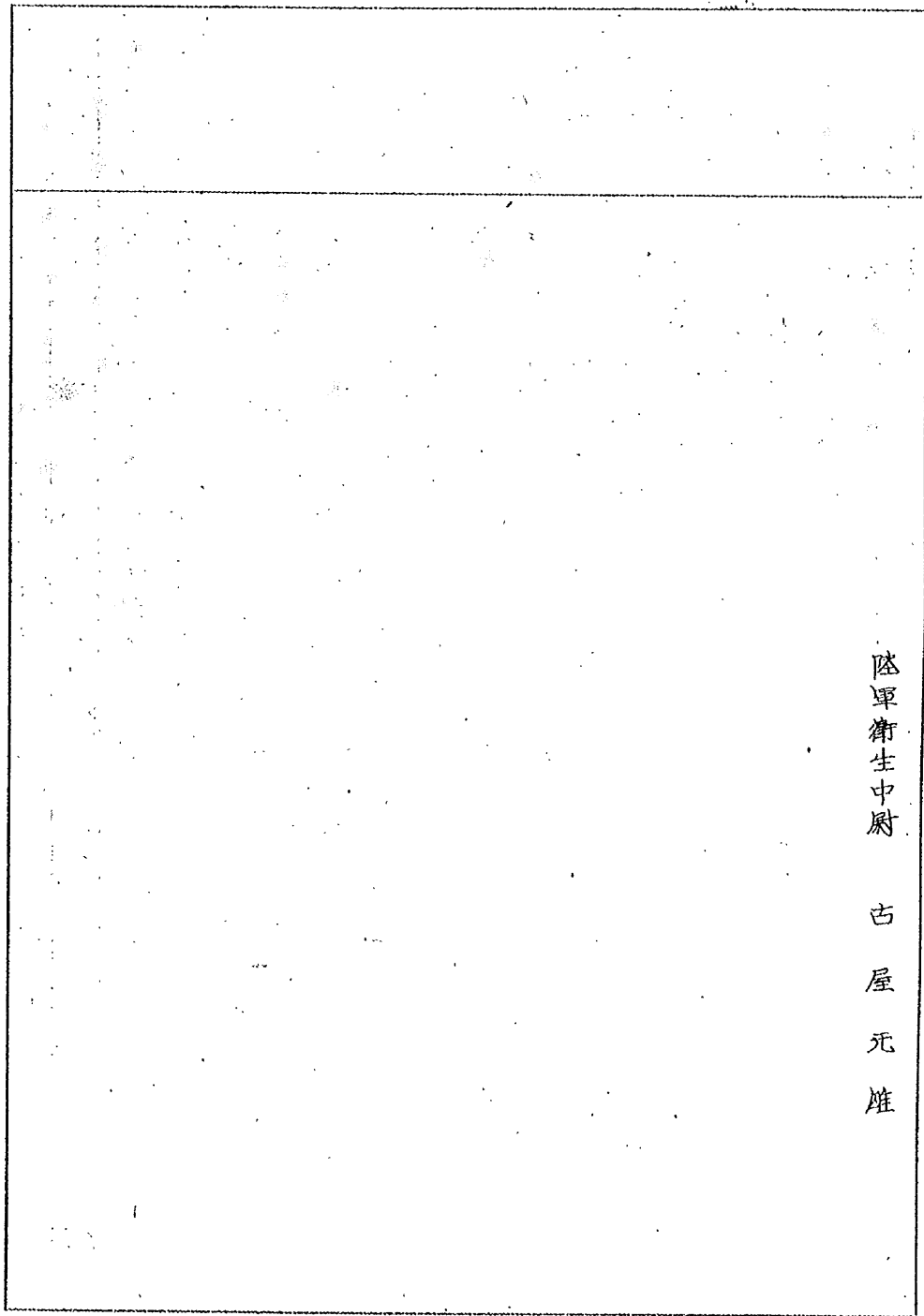
(317)

1958

カ三十七軍カ百四十七兵站病院部隊略歴 (雑 一〇一)

年月日	概要
昭二〇、一、二	軍令陸甲カ一五五号並陸軍機密六七五号成參編カ一号に依りカ一四七兵站病院編成下令
一、一〇	北ボルネオ西海州「ゼツセルトン」カ三十七軍司令部にて編成業務開始
一、一五	編成完結
一、二八	本院を北ボルネオ西海州「メララツ」に開設
一、二七	「メララツ」開設以後本日迄転進並に駐留部隊の患者収療に任ずると共に同地附近の警備に任ず
一、三二	「ゼツセルトン」業務完了
二、三	先発並に病院船衛生員引揚婦女子附添として帰還
四、一四	大部 軍艦「葛城」に乘船 「ゼツセルトン」出港
四、二四	大竹港上陸
四、二五	復員完結
	歴代部隊長名 陸軍ヤ医中佐 大江 健次郎
	部隊事情精通者 広島県広島市大芝町二四一四ノ三

カ三十七軍カ一三外



陸軍衛生中尉
古屋元雄

(3/9)

1960

第百参野戦道隊部隊略歴（一〇〇九）

年月日

概

要

昭二〇、一、二五	北コボルネオレコアピレに於て解散
三、二〇	以降、オニ矢站地区隊として北コボルネオレ、コサンダカンレ、コラノウレ、コタンブナレ、コタンブナレと結ぶ矢站線及びコホーホートレに於て兵站輸送業務に競争しあり。
八、六	当部隊は停戦のためコホーホートレに在りし オニ中隊はコパアンレ島に 其の他の主力の大部はコゼツセルトンレに集結を命ぜられ 本部はコタンブナレを出發
一〇、二五	オニ中隊はコラウナレより
一〇、二五	コゼツセルトンレ地区コパナンバンレに集結を完了
二、二八	コゼツセルトンレ地区オニ收容所に入所せり
一〇、二七	コサンダカンレにありしオニ三中隊は 出發
一〇、二九	オニ收容所に入所し
一三、二〇	其の他はオニ收容所に合せり オニ中隊の一部も亦本部に合するを得パプアン島にある四十名を添き、主力は

コボルネオ

三三三

四二五

百六十七名となり

復員船大衆丸に便乗

帰還 大竹上陸

パパン島に残置せる一部が一中隊長以下四十名は軍司令部と共に帰還する予定なり

歴代部隊長名

宮城原伊兵衛 北村神次郎 宇釜川

陸軍火佐 渡辺 義 男

(32/)

1962

南方オーストラリア軍病院部隊略歴 (雑一〇三一三)

年月日

概

要

昭七、一〇、一五

北コボルネオレコクナンレに於てオ十八師団が四野戦病院を改編し、当院を編成する。

尔後オ三十七軍司令部に転属し、北コボルネオレコクナンレに本院を、「ミリ」コクダツレコアピレコサンダカンレに夫々分院を開設す

一九二二

主力はコアピレに転進
コアピレ分院と合体の上本院を開設す。
尚コクナンレに分院を開設す

三〇、四

状況の急変に伴い、
主力はコポーホートレに転進、本院を開設すると共に、コアピレには前分院を復活開設す

六、習

北コボルネオレ一勢に遊撃作戦に参加中
終戦に至る

編成以来、戦死、戦病死者 計七〇名

終戦前展開中のコクナンレ、コミリレ分院要員はコクナンレに集結

尔余の本院はコビツセルトンレ(旧アピレ)に集結す

自三、三三
四、一五

コクナシ集結中の当院要員帰還者は「ゼツセルトン」に於て、主力と船内に於て合体、主力と共に帰還復員す

其の數、長以下九〇名（他部隊よりの勤務者一四名を含む）

「ゼツセルトン」に残置せる人員、将校以下八八名にして、主力現地出發時病院開設中なり

歴代部隊長名

埼玉原大里郡備羅東方二六三七

陸軍々医中尉 栗原善弥

第三十七軍ボルネオ燃料工廠部隊略歴 (八姓一五八五三)

年月日	概要
昭一七、五、一〇	<p>オニ十一野戦兵器廠「ボルネオ」採油班の要員を以て、灘丸八〇〇部隊南方燃料廠「ボルネオ」支廠を編成せられ、北「ボルネオ」ミリシ「ルトン」セヤリレに在りて採製油業務の復旧及開発に任ず。</p> <p>軍令陸甲オ一八号に依り「南方燃料廠」編成改正に依り「ボルネオ」燃料工廠と改称せらる。</p>
一九、四、一〇	<p>「ボルネオ」島周辺の戦況逼迫し</p> <p>遂に「ミリシ」「ルトン」セリヤレ附近に敵上陸せり。</p> <p>尔来、北「ボルネオ」ミリシ州に於ける激遊撃戦中</p> <p>終戦となる</p>
二〇、一、中旬	<p>工廠主力は「ミリシ」集結せしめられるも</p> <p>「クナン」に転送せられた。</p>
一〇、下旬	<p>「クナン」出帆(輝山丸)</p>
三、三、九	<p>大竹上陸</p> <p>パパン島に集結せしめられたる工廠の一部は</p>
四、三、五	<p>葛城丸にて大竹に帰還復員せり</p> <p>歴代部隊長名</p>

要

(34)

1965

1965

部隊精通者

枋木泉河内郡豊郷村大字大曾九九

陸軍中佐 金沢 似滝

長野県北佐久郡中佐郷村大字平塚二四二

陸軍橋 小池 定男

(32f)

1966

ボルネオ燃料工廠ブルネイ本廠所部隊戦歴

年月日	概
昭二〇、一、二四 五上旬 至自 六、一七 六、一八 至自 六、一七 六、一八	概 要 ボルネオ燃料工廠ブルネイ本廠所開設 所長 藤江中尉 所附将校九名 下士官一二名 兵一三名 軍属一八名 計四三名 ブルネイ製油所建設部閉鎖に依り、残務資材、糶園の整理、管理に任ず。 情勢の变化に依り、奥地開設の必要に迫られ、ボルネオ燃料工廠長及貫兵団 長の命に依り、ミリス州と協力、小町軍曹以下二名及ぶ、ジャワに使役者 三十名を、リンバンに河上流、ウコンに地区に派遣せるも、敵、ムアラに上 陸と呼応、ウコンに地区の、イバンに族約四〇〇名蜂起したるため生死不明と なる。 フルネイ附近の戦斗に参加 損害なし 郷津権員以下九名 貫兵団に現地を召す 戦進作戦に参加 損害 生死不明 軍人四名 軍属二名 計六名 戦病死者 軍人一名

昭和二十年一月二十五日

3901

(326)

1967

至自	八、一三	テノムレ附近の警備
八、一四	終戦	損害 戦病死者 将校一
八、二五	独立混成隊五十六旅団司令部に戦後処置のため専属す	
一〇、一	「ポーホート」収容所に入所	
二、四、一四	「北ボルネオ」西海州「アピ」出帆	
四、二四	大竹上陸	
四、二五	復員完結	
	歴代部隊長名	
	ボルネオ燃料工隊「ブルネイ」出張所長	
	陸軍大尉 錦 戸 市 丸	

ホルネオ才俘虜收容所部隊略歴

年月日	概	要
昭七、八、一五	ホルネオ才俘虜收容所開設（ホルネオ才守備軍に於て編成す） 展開状況左の如し	
八、一五	本所	クチン開設 特校以下 二〇名
	ホ一分遣所	〃 〃 六〇名
一九、四	ホニ	前田 〃 〃 二五名
二〇、二	〃	閉鎖
一七、二	ホ三	ポアク開設 〃 〃 二五名
一九、三	〃	閉鎖
一七、〇	ホ四	アピ開設 〃 〃 三五名
一八、四	〃	閉鎖
一七、八、五	ホ一分所	サンダカン ラナツ開設 特校以下 六〇名
二〇、二	ホ一派遣所	前田 ミリ 開設 下士官以下 一五名
二〇、八	〃	閉鎖
三〇、六	警備員（木人）七名	独混ホ七一旅団に入室
二、一、二	其の補充として門部隊より矢十名の補充を受く 現在復員せらる高桑大尉以下一五九名（アピ地区に収容せられある者）はホ三	

ホルネオ才一六四

8801

(328)

1969

二〇、九

十七軍司令部に金山兵長以下五六名（クナンに収容せられある者）は依混ヤ七十一旅団司令部に転属せらる。
 進駐軍の命により左の如く移動す

川名	所在地	人員	摘要	内地帰還の為 現地出帆(推定)
戦犯収容所	ラグアン	九八	各分所分遣所より 戦犯収容所より不起訴とな りて出所せるもの	昭二、三
日本人柳道所	〃	六	カ一分所ヲラナウシより 戦犯収容所より不起訴とな りて出所せるもの	昭二、四
〃	アピ	七	カ一分所ヲラナウシより 戦犯収容所より不起訴とな りて出所せるもの	昭二、二
〃	パン島	四七	本所並にカ一分遣所より	昭二、二
〃	クナン	五六	本所並にカ一分遣所より	昭二、二

自一七八、一五
至二一三、一

戦死将校一、戦病死将校一、下士官二、雇傭人（本島人）一七
 生死不明、下士官一、雇傭人（本島人）四

自殺、将校一

大竹上陸、復員

歴代所長名

二一三、三一

1970

(327)

本誌

一六

年月日

昭二〇、九、一六

概

要

陸軍中佐 菅 辰次

(「コラダシン」戦犯収容所にて自殺)

部隊事情精通者

岡山県都窪郡茶屋町大字早島新内四二六

人事掛 准尉 吉本 健次

宮崎県名取郡増田本町七

庶務掛 曹長 庄司 倉治

岐阜県恵那郡蛭川村一六三八

庶務掛 曹長 安江 春三郎

0401

(330)

1971

六三十七軍ヲ十一野戦郵便隊部隊略歴（維七八五三）

年月日	概	要
昭一六、二、一〇	東部方四部隊に於て編成着手	
二、三〇	編成完結	
一七、三、一〇	宇岳出帆	
	仏印に向う	
	仏印海防に上陸	
	西貢に到着	
	北「ボルネオ」に野戦郵便所開設の命令に依り	
	將校以下五十五名西貢出発	
	北「ボルネオ」に到着	
	「ミリー」に到着	
	「サンダカン」野戦郵便所開設	
	「クケン」に野戦郵便所開設	
	「ミリー」を分所とす	
	「サンダカン」に野戦郵便所開設	
	「ゼツセルトン」に分所を開設	
	「ラブアン」に分所を開設	

年月日	概
昭和八、一〇、一 一九、四、一	<p>「タワオ」に「カニニ六野戦郵便所」を開設 「ゼツセルトン」を「カニニ六野戦郵便所」に 「サンダカン」を「カニニ五野戦郵便所」に 「タワオ」 「タウ」 「ラブアン」 「タウ」</p>
二〇、三、五	<p>「ラブアン」 「タウ」</p>
至自 二、四、一 二、三、一	<p>戦死 下士官三、兵六 戦病死 下士官五、判任文官三</p>
一〇、三	<p>「テノム」 「ゼツセルトン」</p>
二、三、一〇	<p>復員の為「ゼツセルトン」出帆</p>
四、二五	<p>大竹に上陸 復員完了</p>

概

要

水戸野一七

南方軍カ三通信隊部隊略歴（維一五九一九）

年月日	概	要
昭一七、二、二七 至自 七、四、一四 七、一四	カ四固定通信隊編成北カボルネオレに展開を命ぜらる。 主力 カミリレ一部はカクチンレに展開す 取敢テ独立無線小隊及固定無線小隊の任務継承迄に通信中樞をカクチンレに一部を以テカミリレカセツセルトンレカラブアンレカサンダカンレカシブルレカシマンガンレに各展開完了す カセツセルトンレ後動に伴い中樞をカセツセルトンレ、一部をカミリレカサンダカンレ 展開完了	
八、三、八	南方軍カ三通信隊に編成改制に伴いカボルネオレ地区通信隊を編成 カサボンレに中樞移動 一部はカミリレカサンダカンレカラブマンレにありテ前任務遂行、カセツセルトンレに増加展開す 本状況にて終戦期に到る。	右期間、電政要員（軍政）を指揮下に入れ、後之が独立に伴い後局部通信を申 継

(333)

1974

三三三三三三三三三三

年月日	
概要	<p> 对酒对空情报速報のため十八年末より情报通信を実施せり 歴代部隊長名 陸軍大尉 斉藤芳夫 本籍地 福岡県直方市上新八二〇八 </p>
要	

(334)

1975

第三十七軍憲兵隊部隊略歴 (ボルネオ憲兵隊)
陸軍憲兵大佐 町口 塚

年月日	概要
<p>一七、四、四</p>	<p>ボルネオ守備軍司令部臨時編成完成</p>
<p>一九、九、三二</p>	<p>軍令陸甲ア一三〇号によりボルネオ守備隊軍司令部をオ三十七軍司令部に称号変更</p>
<p>二〇、三、三〇 二五</p>	<p>軍令陸甲ア一〇号に依りオ三十七軍憲兵隊編成下令 編成完結</p>
<p>一七、四、四</p>	<p>編成受員は三五七名なるが、編成は充足、人員は二二七名なり。 憲兵は兵力の増加に伴い軍警備作戦の必要に応じ隊内編成を改正守備地域内各 地区に分地勤務す。 編成装備並に指揮隷属関係 当憲兵隊はボルネオ守備軍司令部臨時編成下令に際し憲兵司令部要員として 増加配属せられ、現地到着後同軍司令部内に憲兵隊を編成し司令部憲兵隊と 称し、遂次内地よりの増加配属又は南方軍憲兵教習隊よりの転属により憲 兵力を充実したり。守備軍編成当初は憲兵は将校以下三〇名なり。 オ三十七軍司令部概要に同じ</p>

年月日	概要
自昭一八〇、一〇 至一九一、二〇 二〇、八、三一 二一、五、三一	<p>但し、隊員中「アピ」事件（昭和十八年十月九日より同月十四日に至る間、西海州「アピ」泉内に於て華僑を主体とする暴徒騷擾惹起し、一部現地へ巡警出に参加させる事件）に關正討伐に参加す</p> <p>討伐部隊は独立守備歩兵第四十六大隊なり。</p> <p>死傷損耗關係</p> <p>現在調</p> <p>戦死二名、病死七、生死不明九、計二七</p> <p>現在頼整理</p> <p>死亡者四四名、生死不明五、合計四九</p> <p>補給關係</p> <p>才三十七軍司令部に同じ。</p> <p>但し、憲兵隊は、隊本部は司令部と所在地を同じくするも憲兵</p> <p>守備地域内各地に配置するを以て兼下各部隊に同じ。</p> <p>衛生關係</p> <p>右に同じ</p> <p>終戦より帰還迄の行動</p> <p>隊本部は停戦後</p>

本レ才一八内

二〇、九二六

一、二、二

武装解除

先発隊として軍司令部及其の他各部隊先発隊と同様ギフオート収容所に入所、其の後パパール俘虜収容所に於て憲兵隊員(補助憲兵及び軍属を含む)は一一般部隊付収以下と分離し重労働に服せしめられ、約一ヶ月にしてラファン島所在の日本人監禁所(AN)に収容(東海州方面の憲兵隊は「サンダカン」島島より直接同監禁所に送る)

戦犯容疑なき者は出所、一般作業隊(パパン島在 作業大隊)に転属、帰還乗船迄作業に従事す。

二、三、一八

四、中

カ一次帰還「アピ」港より
カ二次「」

部隊の経在中特異と認められる事項

当初より野戦憲兵隊編成でなく守備軍司令部要員として増加配属されり司令憲兵隊として憲兵隊を独立形成し守備軍の編成改正(作戦軍化)に依りて野戦憲兵隊として編成す。

歴代部隊長名

ノ、ボルネオ守備軍司令部憲兵隊

憲兵火佐

柳生

活

八ノ下ノ十

年月日	昭五、七、
概要	<p>備考 柳生憲兵火佐は陸大学生として入校の爲、内地帰還せり。</p> <p>カ三十七軍憲兵隊 憲兵大佐 町 塚 塚</p>

要

8501

(338)

1979

オノオオ...

独立混成オ五十六旅団司令部部隊略歴 (資一五八九〇)

年月日	概要
昭五、六、八	下級幹部以下は西部オ十六部隊に應召 軍令陸甲オ六三号に依り改編成す
七、四	内司港出発
七、一六	比島「マニラ」上陸
七、一六	兵器被服等受領を行う
九、五	同地出発
九、一〇	ドルネオ西海州「ゼツセル」に到着
七、一	到着の派団長(参謀、書記若干を附す)の指揮に入る
九、一三	後駐のため同地出発
九、一七	西海州「サンダカン」上陸
九、三一	同地附近の警備、編成業務に従事す
九、三一	独立混成オ五十六旅団司令部編成完結
九、三〇	後駐の為、同地出発
九、三〇	東海州「タワオ」上陸
二、一五	同地附近の警備 オ二次編成完結

要

年月日	概	要
昭二五、一三、一六	旅団参謀陸軍中佐武田大夫出張途中「ゼツセルトン」レ西南方に於て戦死	
二〇、一、	参謀陸軍中佐松本幸次着任	
一、	灘作命「カニ」三号に依り西海洲へ転進を命ぜらる	
三、一六	前記命令に基き主力の「カ」一次部隊同地を出発し「センバコン」レ河に沿う「カ」一矢站線の転進を開始し、逐次転進す	
三、一七	司令部の一部（「ニ」八名）は「ラ」ハダットレ——サンダカン南方——「ケ」ニンゴウレを通ずる「カ」二矢站線の転進を開始す	
三、一八	両矢站線行動開始は時恰も雨期に際合し、降雨と増水になやまされ「カ」二矢站線は加へて食糧惹の如くならば叛劣其の極に達す。	
三、一八	西海州「ケ」ニンゴウレに於て旅団長の引継交代す	
三、二五	本職参謀松本幸次、副官有谷辰蔵「ブル」ネイレに到着	
三、二八	警備具の他の準備を行う	
三、二八	「カ」一矢站線「カ」一次出張部隊「ブル」ネイレに到着	
五、二四	以後逐次到着す	
	「カ」二矢站線行軍部隊の一部到着す	
	前記の如き疲劣と六月上旬に於ける敵情とに依り、其の後の「ブル」ネイレ向け	

オノノフ一六以

至自	六、六七 六、三三	前進不能の状態となる
六、一三	西海州へ転進作戦の爲め同地出発	
八、三	同地附近の警備	
八、一五	本回の転進作戦に当りては、使用に供する地区なく、人跡未踏の大密林の山嶽地帯多く、邦人、婦女子を伴い食糧不足に遭い、疲労又大なり。大詔発令せられ、戦斗行動を中止す。	
八、一六 八、三三	終戦業務及集結の爲の転進処理	
八、二四 八、二八	集結の爲めの転進行軍	
八、二八	「パパール」及「ビツセルトン」に収容所入所	
復員業務及内地帰還準備		
大竹上陸		
復員完了		
歴代部隊長名		
火村 能崎 清次		
二、三、三〇		

年月日	
概要	<p>部隊事情精通者</p> <p>又、火将 明石泰二郎</p> <p>大阪市旭区新喜小路中二ノ二八（昭和二十年五月末日迄）</p> <p>陸軍火佐 有谷辰蔵</p> <p>熊本県菊池郡陣内村大字陣内一六五二</p> <p>陸軍大尉 江藤邦彦</p> <p>香川県綾歌郡松山村大字富屋一〇七七</p> <p>陸軍火尉 林浪男</p> <p>神奈川県藤沢市辻堂一一七〇（昭和二十年二月以降）</p> <p>陸軍中佐 松本幸次</p>

独立歩兵三六七大隊部隊略歴 (貫一五八九二)

年月日	概	要
昭一五 七、七	応召、南方派遣大隊編成	
七、三〇	屯営(姫路)出発	
八、一	竹司港出帆	
八、四	台湾、高雄港着	
八、七	高雄港出帆	
八、二一	ソルソン島北部に到着	
八、三三	機帆船にて同地出帆	
八、一六	比島「マニラ」上陸	
八、二四	(日推定)機帆船にて「マニラ」港出帆	
九、四	兵器受領のため大隊より兵十名残置す(復帰せず隷属となる)	
九、九	(日推定)比「ボルネオ」レ「サンダカン」に上陸	
	(「」)比「ボルネオ」レ「サンダカン」出帆(機帆船にて)	
	暗号教育のため岩佐中尉以下十名残置	
九、二	(日推定)比「ボルネオ」レ「タワオ」上陸	
	同地警備	
一〇、二	(日推定)独立歩兵三六七大隊編成完結	

ボルネオニ内

年月日	概要
昭二九、一一、二一	(月日推定)岩佐中尉以下十名暗号教育修了 機帆船にて「タワオ」後帰途中「タンジヨナル」附近にて敵飛行機のため爆 撃を受け全員戦死す
三〇、一一、一一	部隊は西海州「ブルネー」方面へ移動のため大隊長以下五百名出発せり(途中 大隊長及副官病死す)
四、二	患者及残部整理人員約四百名残置す
四、二	(日推定)残置部隊の内逐次「二」号兵站線にて西海州方面へ移動せり
六、二	(月日推定)西海州「テノム」到着
二、四、二五	独歩七七四大隊に編入す 大竹港上陸 復員完了 歴代部隊長名 輸送指揮官 陸軍中尉 堀尾 総 ボルネオ到着後 陸軍大尉 岡田(名不明)後、少佐

独立歩兵第三六八大隊略歴

年月日	概	要
昭二七、七八	軍令陸甲ヲ六三号に依り、独立混成五十六旅田臨時編成下令	
	同日独立歩兵第三六八大隊要員を島取歩兵第一二一聯隊補充隊に召集	
	同日仮編成完結	
八、八	門司港出發	
一〇、二九	北ノボルネオレ東海州ヲタワオレ島ヲタワオレ上陸	
	同地に於いてオ一次編成完結	
一一、一五	南方軍臨時補充要員の補充に基き次二次編成完結	
	同日よりヲタワオレ附近の防衛並警備	
二〇、三三	難作命甲ヲ三十三号に基き西海州方面兵力転用の總作戦道ヲ三矢站線に依リ	
	ヲタワオレ出發	
五、三二	北ノボルネオレ西海州ヲボートに到着	
	同日より同地附近の防衛並に警備	
六、二四	連合軍、北ノボルネオレヲボートに上陸	
	同地附近の戦斗開始するに依リヲボートに防衛隊として戦斗に参加	
六、二八	大隊長木村大佐戦斗指揮中、右上膊部貫通銃創を蒙る(切斷)	
八、一四	終戦	

昭三、一〇二五

年月日	昭三、一〇二五 三、四二五
概要	<p>北ノボルネオレノゼツセルトシノ収容所 部隊復員完了 歴代部隊長名 陸軍少佐 木村二郎 部隊事情精通者 福島県石城郡四倉町字原田七 三重県鈴鹿市神戸十日市場二八九ノ一七 鳥取県東伯郡西郷村大字八屋二九</p> <p>木村二郎 田辺弘 浦富光春</p>

独立歩兵方三百六十九大隊部隊隊歴 (頁一五八九四)

年月日

概

要

蘭米ルネオコバンデエルマシンによりヂヤバ島を由北コボルネオコクチン
 に向け転進途中ヘパリックパンオニ十二海軍特別根據地隊司令官の指揮下を
 離れ独混七十一旅の指揮下に転用さる
 スマトラ領ピリトン島コマンガルに並にバンカ島コトバリに於て終戦と
 なり左記部隊を残置す

左記

独立歩三六九六三中隊 (大尉山田正行)

神奈川県藤沢市鶴沼町六七一五

右

作業隊 (中尉竹久和祐)

岡山県勝田郡植月村大字植月東九五四

本部各隊の一部

兵力 約二〇〇名

歴代部隊長名

陸軍火佐 榊山 太平

独立歩兵ヲ三七〇大隊部隊略歴 (貫一五八九五)

年月日	概要
昭一九、七、二八	六月十五日軍令陸甲ヲ六三号に依り部隊編成要員九六六名岡山市坂本ヲ一五四
自一〇、一四 至一七、七	門司港出帆 北ヲボルネオレ東海州ヲタワオレに到着 尔後同地附近の防衛警備
二、一五	独立坂本ヲ三七〇大隊編成完結
二〇、二	北中隊北ヲボルネオレヲラハダツトレに分遣 同地附近の防衛並警備に従事せしむ
自一九、二、一五 至二〇、八、一四	部隊損耗並にトクツレ、ヲシンホルナレ附近の戦斗の前後の状況、別紙
自二〇、八、一五 至三一、三	オ一、二、三、四の通り
二〇、一〇、二	終戦に伴い隷軍輸送船に依りヲタワオレ出帆
一〇、二五	北ヲボルネオレ、ヲゼツセルトニレに上陸
二一、四、二五	同地ヲニ收容所入所 復員完結 大井港

歴代部隊長名	陸軍火佐 須賀崎 森之
部隊事情精通者	兵庫泉津名郡志茂町三三一九
岡山県岡山市上伊福東新町三五二	陸軍大尉 富木保雄
陸軍准尉 野上博三	

独立混成方五六旅団歩兵方三七一大隊部隊略歴 (貫一五八九六)

年月日

概

要

昭五、二、二	<p>濰作命甲方 号により独立混成方五六旅団歩兵三七一大隊編成</p>
自一九、二、二 至三〇、三、二	<p>北「ボルネオ」東海州「サンタカン」地区対空防衛警備に従事</p>
二〇、三、二	<p>濰作命方二三号に基き 前田島(ラブアン島)方面転用の為 作戦道方二兵站線を再度出發す (熱帯大密林中の数十日を過し行軍を實行して部隊の約半分が途中熱帯熱マラリアにより落伍す)</p>
二〇、三、二 至三、二 至六、二	<p>北ボルネオミリー州フスマン島に到着す 同島警備す(欠方二中隊)</p>
至自 六、四 至七、二	<p>方二中隊は北ボルネオ西海州ホーホト泉メンパクル地区警備大隊より分離</p>
至自 六、五 至七、二	<p>大隊主力の戦斗状況は本部附島山博志上等兵別紙状況書参照</p>
至自 六、六 至七、二	<p>方二中隊メンパクル附近の戦斗に参加</p>
至自 六、七 至七、二	<p>ホーホト戦斗司令所長の指揮下に入る。</p>
至自 六、八 至七、二	<p>矢野引渡委員長に命ぜられ「サホンロ」に勤務す</p>

ボルネオ

自二〇、一一二九
至二二、四一四

二二、四一四

四三三

収容所生活をす

復員のため北ボルネオ西海州ジエツトセルトン港出帆

復員完結

歴代部隊長名

陸軍大尉 奥山七郎

部隊事情精通者

兵庫浪武庫郡魚崎町横屋四九七

中隊長 陸軍大尉 純石太郎

熊本県飽託郡三和町大字大塘一六八八

小隊長 陸軍准尉 江藤光彦

陸軍浪置川市大字久保字下屋敷

人事係 陸軍上等兵島山博志

戦死 八七九名 復員者 一三三名 計 九九二名

(過半数ラグアン島に於て玉碎す)